

報告

A 小学校の総合学習に「認知症」の学習を取り入れて

細川淳子¹ 金子紀子¹ 前田充代¹ 天津栄子¹ 松平裕佳¹ 金川克子¹

概 要

A 小学 4 年生を対象に「認知症について正しく知ることができ、優しい気持ちで接する大切さが理解できる」ことを学習目標とし、総合学習に取り組んだ結果、以下のような成果がみられた。

小学生は、認知症の学習の前後における高齢者の情緒的イメージ尺度では、「話しやすい」というイメージが増し、総合的にも高齢者を肯定的に捉える方向に変化していた。終了後の事業評価や作文から、2 種類の絵本を用いた認知症の主人公の頭の中を考える講義では、大学生の力を借りながらも「相手の立場に立って考える」ワークを進めていくことが出来た。また、作文の内容から、最後に行われた徘徊模擬訓練では、今までの学習の成果を発揮出来、そのことが最も心に残っていると考えられた。オレンジリングをつけた人物の絵が半分以上描かれていたことから、学習した証となるオレンジリングの配布は意味があり、認知症サポーター講座との連携も重要である。

キーワード 認知症、小学校、総合学習

1. はじめに

2003 年に出版された「2015 年の高齢者介護・高齢者の尊厳を支える介護をめざして」¹⁾の報告には、全自治体が早急に認知症対策に取り組む必要性が示されている。2005 年からはじまった認知症を知り地域をつくる 10 か年構想の一つにキャラバンメイト・認知症サポーター養成がある。地域での理解者を増やすことを目的とした講座が、市民や企業や学校などを対象に開催されている²⁾。認知症サポーター養成が学校でも行われているものの単発的であり、総合学習の一部として位置づけ、複数回にわたり「認知症」について学ぶ取り組みの報告はほとんど無い。今回、我々は、A 小学 4 年生を対象に「認知症について正しく知ることができ、優しい気持ちで接する大切さが理解できる」ことを学習目標とし、総合学習に取り組んだ。その取り組み内容を示し、その成果を報告する。

2. 方法

2. 1 調査対象

対象は、A 小学校 4 年生 20 名（男子 9 名、女子 11 名）である。A 小学校は、山や川、田に囲まれた自然豊かな地域にあり、保護者は兼業農家、サラリーマン家庭がほとんどである。約 8 割の家庭が三世帯同居で、地域の連帯感も強い。A 小学校 4 年生の総合学習のテーマは「ともに生きる」であり、「認知症」の学習の前には老人福祉セン

ターへの訪問を行った。

2. 2 介入方法

総合学習の 7 コマを用いて表 1 に示した内容を実施した。内容は、小学校教諭、認知症予防ボランティアの会（以下、いちご会）会員、研究者らが授業の前に毎回打ち合わせを行い、児童の興味関心や理解度等を検討して決めていった。実施の際は看護大学 4 年生、市職員の協力を得て行った。

1 回目（2 コマ）は、身近な高齢者に関する話を小学生といちご会の会員がグループごとに話をした後、WEB 劇「おばあちゃんどうしたの」³⁾の実演をし、研究者が認知症について講義を行った。2 回目（2 コマ）は、看護大学 4 年生が、認知症高齢者が主人公である絵本の読み聞かせを行った。絵本は 2 種類あり、1 冊は『いつだって心は生きている 大切なものを見つけよう』⁴⁾の第 3 話「僕のおじいちゃんは冒険家」であり、もう一冊は「大好きだよ きよちゃん」⁵⁾を用いた。2 つの話の中でそれぞれ 2 場面を取り出し、主人公の頭の中を考えるワークを展開した。3 回目（1 コマ）は、主人公の頭の中を考えたワークの発表会を公開授業の中で実施した。4 回目（2 コマ）は WEB 劇「おばあちゃんどうしたの」を小学生に行ってもらい、その後、いちご会会員が演じる認知症高齢者役の人を探し、教室に連れて帰ってくる校内での徘徊模擬訓練を実施した。最後に、認知症サポーターについての説明とオレンジリン

¹ 石川県立看護大学

グの配布を市の職員が実施した。

2. 3 評価方法

初回授業の開始時（以下、事前調査）と4回目の授業の最後（以下、事後調査）に自記式のアンケートを実施した。主な質問項目は、①祖父母との同居経験と交流頻度、②SD（Semantic Differential）法による高齢者の情緒的イメージ尺度（12項目）⁶⁾、③授業評価（8項目）である。①は最初のみ、③は最後のみ実施した。②は、各対の語について、いずれが高齢者のイメージとしてより当てはまるかを5件法で回答を得、5～1点を与える。各項目の得点が高いほど一般的に肯定的なイメージを表す。高齢者に対するイメージの悪化が高齢者軽視の風潮や高齢者虐待の原因になるといわれており、今回学習目標としている「優しい気持ちで接する大切さが理解できる」の評価として採用した。加えて4回目の授業終了後に、絵と作文で認知症に関する一連の授業の感想を表現してもらった。

2. 4 倫理的配慮

小学生には、アンケートの記述は自由であり、書かなくても成績等の不利益はないことを書面と口頭で説明した。絵と作文は個人名を出さずに発表する承諾を得た。

3. 結果

3. 1 対象の背景

祖父母と同居が13名（65%）、祖父母と別居の

児童の交流頻度は、1週間に1回以上5名（25%）、1ヶ月に1回以上2名（10%）であった。事前アンケートにおいて「認知症」を聞いたことがあると答えた児童は3名（15%）、ないと答えた児童は12名（60%）、わからないが5名（25%）であった。尚、事前アンケート回答者は20名、事後アンケートは1名の欠席があり、19名から回答を得た。

3. 2 学習前後における高齢者の情緒的イメージ尺度の変化

事前アンケートと事後アンケートにおける高齢者の情緒的イメージ尺度の平均得点を表2に示した。対応のあるT検定で有意差（ $p<.05$ ）が認められた項目は、12項目中、「話しやすい一話しにくい」で、事前が 3.7 ± 1.3 であったのが事後は 4.3 ± 1.0 （ $n=19$ ）であった。12項目の合計は、事前が 43.2 ± 5.6 であったのが事後は 47.6 ± 6.5 （ $n=11$ ）で有意差が認められた。

3. 3 授業評価

事後アンケートにおいての授業に関する質問項目の回答を表3に示した。大学生のおねえさんと話しあいにはできましたか?の問いでは、はい（18名：94.7%）、いいえ（0名）、どちらでもない（1名：5.3%）であった。認知症の人が安心して暮らせるように力になりたいですか?の問いでは、はい（17名：89.5%）どちらでもない（2名：10.5%）であった。

表1. 小学校4年生との「認知症」学習内容

回数	学習内容	主担当
1回 2コマ	身近な高齢者との体験を話しあおう！ WEB劇「おばあちゃんどうしたの」の実演 認知症についての講義	いちご会 いちご会 研究者
2回 2コマ	大学生による絵本（「いつだって心は生きている」「大好きだよキヨちゃん」）の読み聞かせ 各絵本の中の2場面について主人公（認知症の方）の頭の中（認識）をグループ毎で考える	看護大学4年生 看護大学4年生
3回 1コマ 公開 授業	主人公の頭の中（認識）について考えたことをグループ毎に発表（4場面） 上記4場면을さらに深める講義	担任の先生 研究者
4回 2コマ	WEB劇「おばあちゃんどうしたの」 認知症高齢者役の人を探し、教室に連れて帰ってくる校内での徘徊模擬訓練 認知症サポーターについての説明とオレンジリングの配布	担任の先生 いちご会 市職員

表2. 学習前後における高齢者の情緒的イメージ尺度の変化 単位: 点

情緒的イメージ (X-Y)	学習前 (Mean±SD)	学習後 (Mean±SD)	n
温かいー冷たい	4.17±0.86	4.50±0.62	18
うれしいー悲しい	4.42±0.61	4.47±0.77	19
正しいー正しくない	4.33±0.69	4.17±0.71	18
すばらしいーひどい	3.78±0.94	4.33±0.84	18
話しやすいー話しにくい	3.68±1.25	4.32±1.00*	19
お金持ちー貧乏	3.17±0.62	3.17±0.71	18
元気ー病気がち	4.22±0.88	4.06±1.00	18
良いー悪い	4.29±0.77	4.24±0.75	17
忙しそうーひまそう	3.50±1.47	3.67±1.24	18
はやいーおそい	2.65±0.93	3.12±1.17	17
大きいー小さい	2.94±1.09	3.35±1.37	17
強いー弱い	3.17±1.38	3.17±1.34	18

注) とても X ; 5点
 どちらかといえば X ; 4点
 どちらでもない ; 3点
 どちらかといえば Y ; 2点
 とても Y ; 1点

*p<.05

表3. 授業評価

アンケート内容	n=19		
	はい 人 (%)	いいえ 人 (%)	どちらでもない 人 (%)
1. これまでの授業 (4回とも) は楽しかったですか?	19 (100)	0 (0)	0 (0)
2. いちご会のみなさんのお話「おばあちゃんどうしたの?」はわかりやすかったですか?	17 (89.5)	0 (0)	2 (10.5)
3. 大学生のおねえさんと話しあいはできましたか?	18 (94.7)	0 (0)	1 (5.3)
4. 認知症の人の頭の中について考えたことをうまく発表できましたか?	13 (68.4)	2 (10.5)	4 (21.1)
5. 認知症の人への道案内はうまくできましたか?	16 (84.2)	0 (0)	3 (15.8)
6. 認知症の人が安心して暮らせるように力になりたいですか?	17 (89.5)	0 (0)	2 (10.5)

3. 4 絵と作文

オレンジリングをつけた人物の絵が 11 名と半数以上であり、徘徊模擬訓練でのエピソードや認知症の方の頭の中を考えたことの記述内容が多かった。作文の内容を抜粋して以下に示す。

男の子の A さんは、「ぼくは、10 月 18 日から 11 月 14 日まで合計 4 回にん知しょうの勉強をしまし

た。その中で 4 回目にじっさいに学校にいるおとしよりをさがして 4 年教室につれて来ることになりました。ぼく達の班がさがしている人はパソコン教室にいました。4 年教室につれて来る時いろんなことを言われて人の気持ちは考えにくいなと思いました。おじいちゃんやおばあちゃんにも今度からはやさしくしてあげたいです。」と表現し、

女の子のBさんは、「いつだってここは生きているという本を読んでおじいさんが出てきました。そのおじいさんにはんちしょうという病気でおじいさんの頭の中を考えました。始めはなかなか分からなくて大学生の人にヒントをもらって「あつ分かった。なるほど。」と思いました。始めのうちはものすごくむずかしかったけどその1が終わったらその2は考えやすかったです。にんちしょうの人をおこるんじゃなくてその人の立場になるってことが分かってよかったです。」と表現していた。

4. 考察

4. 1 小学生に「認知症」について伝えることの意味

A 小学校4年生の総合学習のテーマは、「ともに生きる」である。小学生は、担任の先生の「みんなはどんな人とともに生きていますか?」の間に答えることからはじめ、地域ではおじいちゃんおばあちゃんとも一緒に生活していることに気づき、おじいちゃんおばあちゃんについての様々な話をはじめ。その後、WEB 劇の中で「認知症のおばあちゃん」に出会う。初回、認知症について解説はするものの小学生には難しい印象も受けた。しかし、認知症の主人公の頭の中を考えるワークでは最初は絵本に描かれた主人公の不思議な行動に目が向いていたが、大学生の力を借りながらも一生懸命にその不思議な行動の意味やその時の気持ちなどを考えることが出来た。その成果は最終回に発揮され、徘徊模擬訓練では、「お腹が空いて動けない」という高齢者に対し、「ぼくの給食をあげる」と話しかけたり、「お里に帰る」という高齢者に「こっちの方が近いよ」と優しく語りかける姿が見られた。授業終了後に実際に給食と一緒に食べていくと約束したといちご会会員を引き留める姿も見られた。

今回この取り組みの評価として、小学生からの授業評価では、認知症の人の頭の中について考えたことがうまく発表できなかった小学生が2名いた以外は他のどの項目でも「はい」または「どちらでもない」という意見であり、高齢者の情緒的イメージ尺度の前後比較でも、総合的に肯定的イメージに変化しており、概ね良好であったと思われる。しかし、これらの尺度だけでは十分に成果を表現しきれていない。小学生のもつ力を表現できるような評価方法を模索していきたい。

また今回、教材として使った絵本の中の「いつだって心は生きている 大切なものをみつけよう」

は、「子どもの時から認知症の高齢者とふれあう機会があったらいい」という市民の声をヒントに、大牟田市の認知症ケア研究会が地域の24人に子どもたちと認知症本人・家族と共に作成したものである⁷⁾。大牟田市では絵本や子どもたちの力を借りて地域全体に認知症の理解が広がり、支えあう意識が高まることを願って平成16年度から小中学校の総合学習の時間を使って絵本教室を開催している。我々も3回目を公開授業にあてることで子どものみならず、その親の世代にも働きかけることが出来たと考える。地域の人達と一緒に認知症について考え、みんなで支え合える社会にしていきたい。

4. 2 認知症の総合学習を支える仕組み

図1にはこの取り組みに関わった組織や団体を表現した。いちご会会員とのふれあいを通し、小学生は高齢者と話しやすいイメージが持てたのではないかと考えられる。また、大学生のサポートで認知症の人の認識を考えるワークが進んだと考える。これらの関わりは、研究班が各団体とコーディネーター役を行ったことから実現した。また、当初「認知症予防かるた大会」の開催をお願いに行ったところ、小学生を教育する立場から様々な意見や助言をいただき、総合学習という貴重な時間を提供していただくに至った。大学生との交流は小学校からの意向で実現されたものであり、多くの関係者の話し合いがあってこそ成り立っている。加えて、小学生が最終に描いた絵と作文の中の絵には認知症サポーターの証であるオレンジリングをした人物の絵が多かった。このことから、認知症について学習した証としてオレンジリングがあることは子ども達にとってプラスとなっていると思われた。オレンジリングは厚生労働省の「認知症を知り地域をつくる」キャンペーン認知症サポーター100万人キャラバンで配布しているものであり、事務局となる自治体との協働も重要である。日頃同じ地域に暮らす大人が、次世代を担う子ども達へ、認知症という難しい病気をわかりやすく伝えようとするその時間そのものにも、意味ある。いかに、子ども達の心を動かすような語りや触れあいにするかの工夫を重ねていく必要がある。

謝辞

今回の総合学習にご協力頂きました小学校関係者の皆様、市職員、看護大学生、いちご会会員の

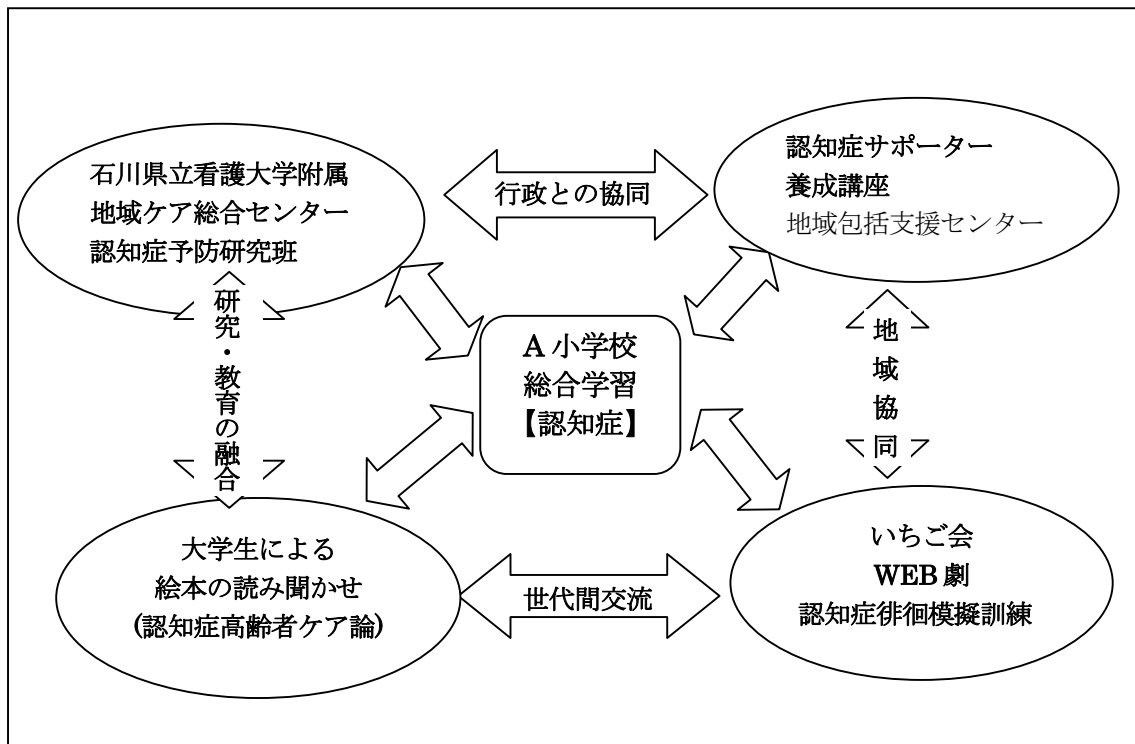


図 1. 認知症の総合学習を支える仕組み

皆様に深く感謝いたします。なお、本研究は、石川県立看護大学附属地域ケア総合センターの調査研究助成を受けて実施したものであり、この要旨は第 9 回日本認知症ケア学会で発表した。

引用文献

- 1) 高齢者介護研究会：2015 年の高齢者介護—高齢者の尊厳を支える介護をめざして。厚生労働省，2003.
- 2) 認知症になっても安心して暮らせる町づくり 100 人会議事務局：「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーン報告集. 認知症介護研究・研修東京センター，2008.
- 3) 社団法人 認知症の人と家族の会（旧呆け老人をかかえる家族の会）Web：劇『おばあちゃんどうした

の？』，www.alzheimer.or.jp/kodomo，2002.

- 4) 認知症ケア研究会：いつだって心は生きている 大切なものを見つけよう。中央法規出版，2006.
- 5) 藤川幸之助：大好きだよキョちゃん。クリエイツかもがわ，2006.
- 6) 吉川武彦：都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS”-3. 児童の高齢者イメージに及ぼす短期的影響”。厚生労働科学研究費補助金（長寿科学総合研究事業）分担研究報告書，40-49.
- 7) 大谷るみ子：大牟田市の認知症への取組み 認知症でもだいじょうぶな町づくり—他職種協働・地域協働・他分野協働—. CLNICIAN, 558, 103-111, 2007.

（受付：2008 年 10 月 14 日，受理：2008 年 12 月 16 日）

The study of "Dementia" is taken to the Integrated Study in an Elementary School

Junko HOSOKAWA, Noriko KANEKO, Mitsuyo MAEDA,
Eiko AMATSU, Yuka MATSUDAIRA, Katsuko KANAGAWA

Abstract

As a result of doing it, and having wrestled with the learning aim that it was“important that I should understand dementia clearly, and make contact in a gentle way that they could understand,”the following results were obtained by an A elementary school fourth grader in synthetic learning.

With the standard emotional image of the senior citizen both in front of and behind learning about dementia, images about it being easy to “talk”increased, and the primary schoolchild changed in the general direction of an arrested senior citizen, affirmatively and generally. I was able to go ahead through the work, in which I“stood in the situation of the partner, and to think”about it, while borrowing the power of the university student from the business evaluation at the end, and a composition following the lecture, in which I used two kinds of picture books to think about being in the mind of the chief character with dementia. In addition, from the contents of the composition, I was able to show the results of conventional learning by performing the loitering sham training last, and it was through it that I remembered most, because the picture of the person who attached an orange ring was more than half drawn. As for the identification and distribution of the orange ring, this is where I learned that there is a meaning, and that cooperation with the dementia athletic supporter lecturer is important.

Keywords dementia, elementary school, study